

# 心理学の実験実習のレポート作成行動と遅延価値割引の関係

Delay discounting and studying behavior in Japanese university students.

○青山謙二郎・高木悠哉<sup>2</sup>

<sup>1</sup>同志社大学心理学部 <sup>2</sup>奈良県立医科大学・同志社大学こころの生涯発達研究センター

Kenjiro AOYAMA, Yuya TAKAKI

(Doshisha University) (Mara Medical University)

keywords: delay discounting, studying behavior, self-control

## 問題と目的

報酬の支払いに遅延が伴うことで、その報酬の価値が割り引かれるが、この現象は遅延価値割引と呼ばれる。遅延価値割引の個人差は、様々なセルフコントロール行動の個人差と関係する。本研究では、大学生が心理学の初級実験のレポートを作成する行動と遅延価値割引の関係を検討した。先行研究(青山・高木, 印刷中)において、遅延価値割引の程度が緩やかな学生は、レポートの作成に費やす時間が長いという相関関係が示されている。ただし、そのような相関関係は学部2年生において認められたが、1年生においては認められなかった。本研究では、別のサンプルを用いて、この研究の結果を追試することを主な目的とした。具体的には1年生の比較的早い時期と遅い時期で2回測定を繰り返した。

## 方法

### 研究参加者

心理学を専攻する学部1年生36名を対象とした。参加者の平均年齢は18.4 ( $SD=0.6$ ) 歳であった。報酬として500円分の図書券を渡した。

### 手続き

研究は春学期(前期)と秋学期(後期)に1回ずつ実施した。2回とも、まず小集団において遅延価値割引の程度を測定し、次にレポート作成行動の記録を依頼した。

①遅延価値割引の測定 青山・高木(印刷中)と同様に調査用紙を用いて測定した。質問の選択肢は常に即時小報酬を左側、遅延大報酬を右側に配置して提示した。遅延大報酬の遅延期間は1ヶ月、6ヶ月、1年、5年の4条件を設定し、全員にこの順序で提示した。大報酬の額は5千円と10万円の2条件を設けた。条件数は、遅延4水準に大報酬額2水準を組み合わせ合わせた合計8条件であった。

各条件はA4版の質問紙1枚につき1条件ずつ割り振り、質問紙1枚の中では大報酬の額と、遅延期間を固定した。そして「今すぐにもらえる」小報酬の額は、10万円条件では5千円から9万5千円までの5千円刻み、5万円条件では250円から4750円までの250円刻みのそれぞれ19段階を昇順に配した。また大報酬の提示順序は5千円条件が先行する場合と10万円条件が先行する場合とを設定した。

実験開始時に書面により研究参加への同意を得た。その後、質問紙への回答方法を教示した。その内容は、お金が実際にもらえると仮定して選択すること、選択は左右の金額のうち好ましい方をマルで囲むことにより行うこと、しばらく同じ側の選択が続くと思った場合にはまとめて大きくマルで囲んでもよいことであった。教示の後、その場で遅延価値割引の測定を行った。

②レポート作成行動の記録 遅延価値割引の測定後、レポート作成行動の記録方法を教示した。実験演習科目では、半期に3つのテーマの実習を行い各テーマの最終授業の翌週までにそのテーマについてのレポートを提出させていた。今回の研究では、春学期の2回目および秋学期の1回目のレポート作成行動を記録した。記録欄はA4サイズの用紙に、レポート提出前の14日間にレポート提出当日を加え計15日分を用意した。記録欄は1日ごとに区分けし、勉強を開始した時刻と終了した時刻とを記入する欄を設けた。

記録対象となったのは、実験演習科目のレポートを作成するための行動であった。なお、個人の特定はできず、したがって記録用紙に記録した内容は科目の成績に反映されないことを強調した。その後、レポート提出時に、記録用紙を提出させ、謝礼として図書券を渡した。

## 結果と考察

遅延価値割引の指標は、Myerson et al.(2001)に従い、曲線下面積を用い、その面積を標準化した上で平均した。面積は1から-1の範囲の値を取り、価値割引が緩やかであれば面積が大きく、割引が激しければ面積が小さくなる。今回は、面積が0.25以上の13名を割引小群、面積が-0.25以下の13名を割引大群とした。

レポート作成行動の指標としては、①15日間の学習時間の合計(総学習時間)と②総学習時間の内、レポート提出日の前日および当日の2日分の学習時間の占める割合(一夜漬け率)を算出した。

**春学期の結果** 総学習時間、一夜漬け率とも群間に有意な差は見られなかった。

**秋学期の結果** 総学習時間と一夜漬け率の平均値を表1に示す。割引大群の方がやや勉強時間が短く、群間に有意傾向が認められた( $t(19.6)=1.74, p<.10$ )。一夜漬け率には群間に有意な差が見られ( $t(24)=2.15, p<.05$ )、価値割引大群の方が一夜漬け率が高かった。このことから、1年生がレポート作成にある程度慣れた頃に、遅延価値割引の激しい学生は学習時間が短くなり、一夜漬け的な学習行動になることが示された。

(本研究の実施にあたり、同志社大学文学部心理学科2006年度生の熨斗華衣さんの協力を得ましたことを感謝します。)

表1 秋学期の総学習時間(分)および一夜漬け率の平均値

	総学習時間(分)	一夜漬け率
割引小群	766.8 (324.5)	0.22 (0.21)
割引大群	656.6 (255.1)	0.40 (0.22)

( )内はSD